

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2114 号

Association between C-reactive protein level at hospital admission and long-term mortality in patients with acute decompensated heart failure

(急性心不全患者における入院時 CRP 値と長期予後の関連)

松本 紘毅 (まつもと ひろき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

入院時における血中 C 反応性蛋白 (C-reactive protein: CRP) 値は急性冠症候群をはじめとした心血管疾患の予後と関連すると言われている。しかしながら、急性心不全患者において、入院時 CRP 値と入院中の死亡率との関連に関する報告はあるが、長期予後との関連に関しては十分でない。今回我々は、2007 年から 2011 年に順天堂医院に入院した急性心不全患者を対象とした検討を行なった。基準を満たす症例を入院時 CRP 値の 4 分位数に基づき 4 群に分類した。解析対象となった 527 例のうち、142 例 (27%) が平均追跡期間 2.0 年の間に死亡した。多変量解析の結果、入院時 CRP が最も低値の群 (Q1: CRP < 0.3 mg/dL) と比較して、CRP 高値の群 (Q2: $0.3 \leq \text{CRP} < 1.0 \text{ mg/dL}$; Q3: $1.0 \leq \text{CRP} < 3.9$; Q4: $\text{CRP} \geq 3.9$) でいずれもハザード比が上昇しており、CRP 値 4 分位が増加するにつれ有意にハザード比が増加していた (P for trend, 0.034)、また自然対数変換した CRP を連続変数として解析した結果、有意に死亡率と関連していた (HR 1.16, $p=0.030$)。これらの結果から、急性心不全患者において入院時 CRP 値と長期予後は有意に関連していると考えられた。